



ときは大正。学祖井上円了先生は当時本郷区駒込蓬萊町（現在の文京区向丘2丁目）にあった哲学館で学生を相手に毎週茶会を開いていました。これが「哲窓茶話」という形で文献に収められています。いまの世に通じる、物事の核心をズバリ突くことを言っておられたのは前回ご紹介したとおり。これに対して哲学堂で行われた講話に手を加えたものが「奮闘哲学」としてまとめられています。

明治維新後、学校教育は広く行き渡るようになったものの、「西洋人の学説を八百屋のごとく並べたつ」学者の在りように疑問を抱き、説いたのが今回ご紹介する「奮闘哲学」の一部です。円了先生の、反骨精神あふれ、冴えわたる口上をとくにご拝聴ください。

vol. 2

今の学者は貴族で困る
飯はたべても米知らず
わたくしや東京赤門そだち
米のなる木はまだ知らぬ
知恵を磨けば鍬鎌さびる
これでは国も立ち行かぬ
学者さんなど屁理屈ばかり
理屈で国が富むものか
書物読むとて書物に読まれ
文字の間で立往生
世間知らずの死学じゃこまる

活きたる学問するがよい
死学する人しんから嫌い
屁理屈いうひとなお嫌い
西洋学問受け売りやめて
早く製造元となれ
今の学者は怪物なるか
足は幽霊鼻天狗
天狗ばかりが肩背をならべ
鼻のつきあい日を暮らす
足はヒョロヒョロ鼻だけ高い
お化け学者の多い世じゃ

わか国のことわざに『船頭多くして船山に登る』というのがあるが、余にいわせれば『学者多くして国淵に沈み、先生多くして生徒屋根に上る』じゃな。あるいはこうもいってもよかるうて。『船頭多くして船山に登り、藪医多くして人墓に入る。政客多くして民巷に泣き、学者多くして国淵に沈む』とな。ほっほっほっ。



蓬萊町校舎



先生は自らを福沢諭吉の『平民的学者』より一段低い『土百姓の学者』と位置づけ、世間一般の書物には頼らず、古人の句に頼らず「ただ自ら作りし格言韻文を特書して、説明の資料となせり」と、独自の哲学を構築し、若者に説くことに力を尽くしました。いかがでした？ 哲学者としてお堅いイメージのある先生ですが、どうしてどうして、話せることをおっしゃっているではありませんか。